

2001（平成13）年度 東京大学 入試問題 第1問 解答例

一 筆者は、異文化である日本文化の内部に至る障壁にも入口にもなる、美しい日本語自体を、実際そのまま小説に書きたかったから。（～書きたいという点。）

二 日本人として生まれた多くの者が、自民族の特性として当然共有していると思込み、その感性を支配されている母国語。

* 「～日本語」とは「どのようなものか。」と問われているのであるから、解答として「…な日本語。」では不可。「日本語」そのものの説明が必要である、ここでは「母国語」。

三 外国語として日本語を読む者は、異文化として正確に偏見なく鑑賞すべきであるが、絶対日本人らしくは書けないということ。

* 「永久の「読み手」でありつづける」は、「書き手にはなれない」ということである。

四 在日外国人として民族特性は共有しないが、日本で生まれ育って獲得した、日本語による世界の感知を自然とする言語感覚。

* 「おおよその日本人」ではなく（外国籍）、「母国語」でもないが（韓国語）、日本語ネイティブ（在日）として、「日本語で世界を感知」できる言語感覚を有しているということ。

五 日本と西洋だけでは日本語で世界を感知して書いたといえず、筆者は中国に渡った。英語と中国語の記憶をもつ主人公の小説を日本語で書こうと思い、帰京後に両言語の記憶を想起するうち、外国語としての日本語も記憶と化し、日本語の感性を獲得したということ。（一二〇字）

* （李良枝のようなケースとは異なるが、それらに匹敵するような意味での）「日本語の感性」を、アメリカ人である筆者がついに入れた、すなわち、「日本語で世界を感知」できるようになった、ということへの言及のない解答は、不可。「日本語がグローバルなものになった」といった意味ではなく、外国人の筆者が日本語作家としての自分の位置を見出すようになったといった心理的社会的な自己同定の問題でもない。

* 「筆者の体験に即して」、「二つの大陸の声を甦らせようとしているうちに」「(母国語の英語も、外から眺めていた「Japanese literature」すら) 記憶に変わっていったことへの言及が不可避である。したがって、「記憶」もしくは「想起」という内容への踏み込みのない解答は、不可。母国語の英語が記憶と化すとすれば、記憶を想起している側の意識は何語なのか？ これが「日本語としての私」の成立であろう。その推論を「述べよ」という設問要求によって求めていると考えられる。

六 a 激励 b 排除 c 普遍 d 媒体 e 崩壊